

# 浅田栄次の谷本富批判

——「耶穌教駁議」を中心に——

野崎晃市

## 序

浅田栄次（一八六五—一九一四）は一八九三（明治二六）

年一月一九日牛込松方町金堂における「聖書の三良友」と題する講演で、井上哲次郎（一八五五—一九四四）の「教育と宗教の衝突」と共に谷本富（一八六七—一九四六）の「耶穌教駁議」を批判し次のように述べた。

の中一個の資格も具へざるものなれば、假令彼輩百万巻の書を著すとも、聖書に於ては何の痛痒をも感ずることなからん

さらに一八九四（明治二七）年一月四日に行われた仙台美以教会での「駁耶論者ノ厚意」と題する講演においても谷本の「耶穌教駁議」に激しい批判を繰り返している。このことは谷本の議論がキリスト教界において注目され、また浅田がこれに対し危惧を抱いた事を示している。浅田の「駁耶論者ノ厚意」の中での批判は次のようなものである。

「聖書の三良友は、博言学者、歴史学者、及び真理探究者なり、然れども、唯其の一のみに偏するものは、完全なる良友といふべからず、故に聖書の最良友たるんには、博言学に通じ、歴史学に達し、且つ真理を求むるものたらざるべからず、向きに「教育と宗教の衝突」を著したる先生、又本年九月以来の哲学雑誌に於て、「耶穌教駁議」てふ一篇の論文を掲ぐる学士の如きは、此三者

「頃者哲学雑誌ニ谷本富氏ノ耶穌教駁議アリ、未タ聖書ヲ研究セス、基督教ノ真理ヲ解セサル輩ハ之ヲ讀テ其ノ議論ニ同意ゼン、余此ノ論文ヲ讀ミテ感スル所アリ、即チ駁耶論者ノ口実ハ古今同一轍ニ出テ、基督教ヲ斥ケン

トシテ自己ノ無宗教不道徳ヲ顕ハシ、聖書ヲ攻撃セントシテ却テ自己聖書ヲ研究セサルコトヲ示ス、況ニヤ此ノ如ク不完全ナル輕忽反対家ノ議論ヲ丸呑ニシテ譲究スルモノニ於テハ、頗ル体裁ノ言フニ忍ビザルモノアリ、余ハ之ヲ觀テ益耶蘇教城ノ堅平ナルヲ感ジ、攻擊家ノ鋒及ノ鈍ナルヲ笑フニ堪エス、実ニ谷本氏ノ如キハ此ノ如キ文書ヲ作りテ余カ信仰ヲ固フスルモノナリ、余深ク氏ノ厚意ヲ謝セサルヲ得ス」

浅田は上述の講演の中では表面的に谷本の「耶蘇教駁議」に触れているに過ぎず、具体的な内容にまで立ち入つて批判してはいない。しかし谷本の議論に対しキリスト教側から原田助（一八六三—一九四〇）が、「六合雜誌」明治二七年三月号からやはり五回にわたって「耶蘇教駁議を読む」と題し反論を試みている。また浅田栄次も「六合雜誌」一六二号（明治二七年六月一五日号）に「高等批評とは何ぞや」と題する論文で、谷本富の旧約聖書への「高等批評」を用いた批判へ詳細な反論を寄せている。

谷本の用いた「高等批評」とは聖書の歴史的・文献学的研究を科学的に厳密な方法を用いて再検討するという聖書学上的方法論である。浅田や原田らアメリカやドイツで「高等批評」を学んだ神学者が、なぜ激しく谷本に反論せざるを得なかつたのか。それは谷本のキリスト教批判がこの「高等批評」と呼ばれる聖書学また神学上の方法を導入したものであつたがゆえに、日本のキリスト教界において神学的方法論であつた「高等批評」の受容を巡る議論を引き起こしたからである。すなわち谷本の「耶蘇教駁議」は「教育と宗教の衝突」論争の中において、「宗教と教育」のあり方への問い合わせと同時に、「高等批評」と呼ばれる歴史的・文献学的方法により危機に直面していた神学の存立可能性への問い合わせを提出したという点で特異なものであった。それゆえ、谷本の「耶蘇教駁議」を巡る議論を考察することにより、近代キリスト教神学の一方法であつた「高等批評」に内在した合理的思考の限界を明らかにすることができるのではないか。それを問うことによつて浅田ら西洋で「高等批評」を学んだ者が内面に抱えた、明治時代における「高等批評」によるキリスト教信仰の変容という問題を浮き彫りにすることが本論文の目的である。

しかし、まず谷本によつて「高等批評」という方法を利用してキリスト教批判のために書かれた「耶蘇教駁議」という論文が、井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」を巡る議論といかかる関係にあつたのかが明らかにされねばならない。この「耶蘇教駁議」は谷本富が山口高等学校教授時代の一八九三（明治二六）年九月に発表した論文であるが、井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」が引き起こした議論の陰に隠れてほ

とんど言及されることはなかつた。しかし谷本の「耶蘇教駁議」を巡る議論には、「教育と宗教の衝突」のもう一つの側面が隠されているのである。それは「高等批評」の妥当性を巡る神学上の問題と、「宗教と教育の衝突」によって引き起こされた「宗教と教育」のあり方という位相の異なる二つの議論が交錯する地点に存在する。この二つの議論の結び目を谷本の「耶蘇教駁議」を中心にして解きほぐすによつて、これまで光の当てられることのなかつた「教育と宗教の衝突」のもう一つの別の側面を浮かび上がらせることができるのではないか。

そのため谷本の「耶蘇教駁議」はいかなる背景の下に書かれたのか、その思想的位置づけを語らなければなるまい。浅田が激しく批判した谷本富とはどのような思想の持ち主であつたか。そして谷本の論文「耶蘇教駁議」は谷本の思想においていかなる位置を持つのか。

### 谷本富の思想的位置

谷本富は一八六七年（慶應三年一〇月一七日）高松に生まれた。一八七八（明治二二）年一月公立高松病院付属医学所に入學し医学を学んだが、一八八一（明治一四）年三月に卒業時には十五歳であり二十歳未満であったので法律上の問題

で医術開業免許状は与えられなかつた。一八八二（明治一五）年に上京し中村正直（一八三二—一八九一）の同人社で英語を學習し、一八八五（明治一八）年七月に卒業。一八八五（明治一八）年九月に東京大學文学部選科生として哲学科に籍を置き、大西祝（一八六四—一九〇〇）・清沢満之（一八六三—一九〇三）らと交流を深め、一八八九（明治二二）年七月に哲学全科修了となつた。谷本は統いて帝國大學文科大学内に設置された尋常・高等中學校教員養成のための教育学科特約生として、一八八九（明治二二）年九月よりエミール・ハウスクネヒトよりヘルバート教育学を学んだ。この特約生教育学科の制度はハウスクネヒトの帰國により一年で終了し一八九〇（明治二三）年七月に卒業、同年一〇月に山口高等学校教授、一八九四（明治二七）年に東京高等師範学校教授となり、一八九九（明治三二）年九月より歐州留学を命じられ、三年間ほど仏・独・英などで教育学の研究を行つた。一九〇五（明治三八）年七月に教育学関係における日本で初めての博士号を取得し、その後一九〇六（明治三九）年七月より京都帝國大學文科大学などで教育学を講じた。一九一三（大正二）年に京都帝國大學に赴任した新総長沢柳政太郎（一八六五—一九一七）との衝突により辞任に追い込まれ、それ以後は佛教大學（現在の龍谷大學）などで教えた。

谷本はヘルバート教育学を紹介した『實用教育学及教授

法<sup>(1)</sup>によって教育学者の地位を確立し、日清戦争後には『将来の教育学<sup>(2)</sup>』において国家の維持と反映を目的とする教育を唱え、海外留学後には『新教育講義<sup>(3)</sup>』の中でフランスの教育学者ドモラン<sup>(4)</sup>の新教育理論を紹介すると共に宗教教育の導入

を主張するなど教育学理論の紹介者また活発な講演活動による啓蒙家として教育学史上に位置を占めている。一方で谷本は教育学者でありながら宗教に強い関心を示し、宗教関係の著作や論文が多く「宗教と教育」の関係についてもしばしば

教育学の立場から発言している。谷本の宗教関係の著作は多数あるが、必ずしも学問的著作ではなく仏教関係者を前にした座談会などでの講義を纏めたものが多い。そのためこれ等の宗教に関する著作は「谷本教授の宗教学研究には博学多読の割にみるべきものはない……野依秀市氏等と組んでの仏教通俗宣伝に堕せられたのはかえすがえすも残念である」と酷評されほとんど考察されることとなかった。

谷本の「耶蘇教駁議」は『哲學雑誌』明治二六年九月号から五回に分けて連載された。この論文が井上哲次郎（一八五五—一九四四）の『教育と宗教の衝突<sup>(5)</sup>』が単行本として出版された時期と符合していることは、この論文が井上哲次郎の議論に触発され書かれたものであることを示していると言えるであろう。この井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」論争とはいかなるものであったか。

井上哲次郎は一八九〇（明治二三）年一〇月二三日に留学先のドイツより帰国し、同月二三日に帝國大学文科大学教授となつた。「教育勅語」が廃止されたのは同年一〇月三〇日であつたが、文相芳川顯正は「教育勅語」の注釈執筆をこの新進氣鋭の学者と目された井上に依頼した。井上による「勅語衍義<sup>(6)</sup>」の草案は中村正直、加藤弘之、井上毅、島田重礼等の意見を参考に修正された後、文部省の認可を経て天覧に供された。「教育勅語」の解説書は二百種類以上が出版されたが、文部省の認可と天覧まで得たものは井上の「勅語衍義」のみであった。井上哲次郎は「勅語衍義」によつて、「教育勅語

巡る神学者たちとの議論の中に、谷本の「宗教と教育」に関する以後の思索の出発点がある。

### 「教育と宗教の衝突」論争と谷本富

を道徳的権威の中心とした教育体制の確立の理論的基礎を築くことを試みた。

その井上哲次郎のキリスト教批判を引き起したのが、所謂「内村鑑三不敬事件」である。内村鑑三（一八六一—一九三〇）は一八九一（明治二四）年一月九日に第一高等学校で挙行された『教育勅語』の挙戴式において、『教育勅語』にある天皇の御親筆への敬礼に躊躇し十分な敬礼を尽くさなかつたとして辞職に追い込まれた。井上哲次郎は『教育時論』（一七二号）（明治二十五年一月五日）に「宗教と教育との関係につき井上哲次郎氏の談話」を発表し、激しいキリスト教批判を開闢した。井上はこの論文において内村鑑三を批判し、キリスト教は『教育勅語』の精神と相容れないと主張した。井上は翌年さらに『教育と宗教の衝突』を單行本として出版しキリスト教批判を強めた。

井上哲次郎の主張は、本多庸一（一八四八—一九一二）、植村正久（一八五八—一九二五）、高橋五郎（一八五六—一九三五）らキリスト教徒からの激しい反論を招いた。井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」を巡る論争で問題となつたのは、『教育勅語』の礼拝などを通じて進行しつつあつた天皇制を中心とする近代国家の確立とキリスト教がいかなる関係にあるかというものであつた。

谷本の『耶蘇教駁議』は井上に影響を受けてキリスト教批

判を意図したものであつたが、その批判の方法と目的は井上とは異なるものであつた。『耶蘇教駁議』は序論、第一章「教育と耶蘇教の衝突」、第二章「耶蘇教と科学の衝突」、第三章「耶蘇教經典の不確立」、第四章「耶蘇教教義の自家撞着」から成る。序論において谷本は過去においてキリスト教が果たしてきた役割は認めながらも、キリスト教はもはや現在ではその力を失いかえつて進歩を阻害していると次のように主張した。

「若シ夫レ近頃世上ニ齧々タル教育宗教衝突論ノ如キハ、是非曲直措キテ問ハサルモ、余ハ耶蘇教其ノ既ニ取ルニ足ラサルヲ知ル、其ノ本既ニ枯レタリ、其ノ末ニ於テ強テ論争ヲ用井サランカ、語ヲ交シテ之ヲ云ヘハ、耶蘇教果シテ勅語教育ノ趣旨ニ悖戾背反スルコトナシトスルモ、サレハトテ、吾輩直チニ之ヲ採用シ、之ニ貶依スルノ懲ヲ学ブヲ用井サルナリ……耶蘇教ハ既ニ科学ノ為メニ殆ント其外壁ヲ破壊セラレタリ。自家經典ノ礎石亦頗ル振動シ、自家神学ノ中陣亦自家撞着ノ大旋風渦中ニ巻キ込マレタリ」

井上哲次郎の議論がキリスト教と『教育勅語』の背後にあら天皇への忠誠を求める日本の国体と衝突する故に批判した

のに対し、谷本のこの論文はキリスト教そのものの存在意義に対して疑問を投げかけるものであった。谷本はキリスト教が科学によつて根本からその存在意義を動搖させられていると主張し、西洋の聖書学の見解を用いて聖書そのものの信用に疑問を投げかけ、聖書の権威によつて立つプロテスタンント神学の根本を攻撃しようと試みたものであつた。谷本自身は後にこの「耶蘇教駁議」について「當時非常に喧アラハしかつた井上哲次郎博士と高橋五郎氏との論争における自家の立場を明かにし、更に百尺竿頭一步を進めて、わが國におけるいはゆる高等批評の先驅を務めた」と回想している。谷本の問題提起は日本のキリスト教思想史上において神学理論にまで踏み込むものであり、浅田栄次や原田助ら神学者にとつて無視できないものであつた。なぜなら谷本の議論は「宗教と教育」の関係を巡る議論を超えて、キリスト教界内部において神学上の方法論である「高等批評」を如何に受容するかという議論と結び付いていたからである。では「高等批評」とは神学思想上いかなる問題をはらむ學問的方法であつたのであるうか。

### 「高等批評」の日本における受容

小崎弘道（一八五六—一九三九）は『日本基督教史』の中で「高等批評」に関して、明治時代のキリスト教界を搖るが

した神学思想として、進化論・比較宗教学・「高等批評」・來世試練に関する問題（アンドーヴィアー神学校問題）と四つの思想潮流の一つに挙げている。これらの説は從来神学者が抱いていた「聖書インスピレーション説」、すなわち聖書は神の靈感を受けているゆえに誤謬はありえないとする説を根底から揺るがし、信仰の動搖をきたして棄教する者も現われた。

金森通倫（一八五七—一九四五）は一八九一（明治二四）年に『日本現今之基督教並<sup>アリ</sup>将来之基督教』の中で「高等批評」の成績を取り入れることを提倡し、「ヨハネの福音書」の筆者は使徒ヨハネであるという従来の説に疑問を投げかけキリストの奇跡や復活を否定し、ついに棄教するに至つた。

さらには同じく熊本バンドの横井時雄（一八五七—一九二七）も一八九四（明治二七）年に『我邦の基督教問題』の中で、神・キリスト・靈魂不滅などの教理に疑問を投げかけ、キリスト教で価値があるのは倫理道德だけであると主張した。こうしたキリスト教界内部での「高等批評」をめぐる思想的変動に加えて、谷本らキリスト教界外部からの「高等批評」を用いた攻撃にキリスト教界内部の保守派は大きな危機感を抱いていた。谷本の「高等批評」に基くと主張された論文は、こうしたキリスト教界内の論争における対立を明確にするものとなつた。

谷本の論文に対して当時青山学院神学部教授であつた浅田

栄次、また日本組合基督教会番町教会牧師で『六合雑誌』の編集にも従事していた原田助は激しい反論を展開した。浅田栄次は一八九一（明治二十四）年五月にノースウェスタン大学と同じ敷地内にあるガーレット聖書学校（Garrett Biblical Institute）を卒業した後、一八九一（明治二十四）年九月ニヨーヨークのコロンビヤ大学大学院博言学科およびユニオン神学校研究科で聖書学を学び、一八九三（明治二十六）年六月シカゴ大学で最初の博士号を授与され、帰朝後は青山学院神学部で教えた聖書学者である。また原田助は一八八四（明治一十七）年六月同志社英学校余科（神学科）を卒業し、一八八八（明治二十二）年九月にシカゴ神学校に入学、一八九一（明治二十四）年五月にはイエール大学神学部を卒業した後渡欧し、ヨーロッパではハルナック<sup>(1)</sup>やオイケン<sup>(2)</sup>等の授業を聴講、帰朝後は東京番町教会牧師、京都平安教会牧師、神戸教会牧師を歴任し、一九〇七（明治四〇）年一月には同志社社長に就任した神学者である。<sup>(3)</sup>

浅田と原田の反論は詳細に谷本の論文を分析しており、キリスト教神学側からの批判を代表したものであつたと見てよからう。谷本富と彼らの議論は「宗教と教育」の範囲を超えて、キリスト教は近代に於いて信仰する価値があるのか否かというキリスト教信仰の根本にまで踏み込んでいる点で井上哲次郎の問題提起より深い意味を持つものであつた。しかし

ながら谷本の論文はキリスト教理解に於いて多くの事實誤認を含んだ粗放なものであつたゆえに、キリスト教側から表面上の誤認を激しく批判されるに止まり、根本的な問題にまで議論が深められることはなかつたともいえる。それにもかかわらず谷本の議論には、キリスト教側から再三にわたつて詳細に反論することを余儀なくさせるだけの危機感を呼び起すものが内在されていた。それは近代神学そのものに含まれる問題でもあり、浅田や原田が如何に表面的に批判しようとも自分自身の内面深くに抱える矛盾でもあつた。

### 原田助の谷本富批判

谷本は「耶穌教駁議」第一章の「教育と耶穌教の衝突」で、キリスト教を「國民的宗教」[National Religion]と定義し、それが内包する排他性故に日本の國体並びに勅語と衝突するという議論を展開した。この谷本のキリスト教に対する「國民的宗教」という定義を谷本の議論に添つて理解するならば、キリスト教はユダヤ教を背景としておりユダヤ人の選民思想ならびに現世國家を望む「猶太的分子」を内に含んでいる。谷本によれば中世においてカトリックが超國家的権威を持ちえたことは、その「猶太的分子」の残存を示すものであつた。その「猶太的分子」つまり「外國々民的」部分が、日本の國

体と衝突するというのが谷本の議論の趣旨である。

この谷本の議論は原田が批判しているように、明確さを欠き一貫した議論とは言い難い。さらに議論の重要な概念である「国民的宗教」という定義が、そもそも妥当性を欠いているといわざるを得ない。原田は「夫れ」の宗教が国民的なるか果た世界的なるかを判断するには（第二）其弘布せる版圖（第二）其教法の性質に就て研究するを要す」と「国民的宗教」について適切な判断基準を提示して谷本に反論している。原田はキリスト教が世界の広範囲にわたって信仰され、その教義の性質も「地位境遇に適應せられ」さまざまに変化していることはキリスト教が世界的であることを示しており谷本の「国民的宗教」との定義は適切ではない。原田の批判は谷本の議論の学問的妥当性の問題をひとまず置いて、谷本の所謂「猶太的分子」への警戒感の深層意識を探るならば、それがヨーロッパにおける「反ユダヤ主義」と同根のユダヤ人への恐怖感を示しているといえるのではないか。谷本の議論にはこうした恐怖感を読者に与えるデマゴーグとして機能した側面がある。

第二章の「耶穌教と科学の衝突」で谷本はドレーパー（John William Draper, 1811-1882）の議論などを紹介しつつ、地質学者や進化論と「創世記」の記述の衝突、聖書中の奇跡の記述は

科学法則に当てはまらず伝説・神話の類に過ぎないと論じた。

ドレーパーはニューヨーク大学医学部の教授で、*History of the Conflict between Religion and Science*においてキリスト教と科学の衝突史を描き出した。この書は一八八三（明治一六）年に『宗教史論』（一名耶穌教と實學との爭闘）と題して小栗栖香平によって翻訳され、一八九三（明治二六）年には訂正増評版が出版されている。ドレーパーはこの書において、地動説を唱えたガリレオを裁判にかけたようにキリスト教は科学に圧力を加え続けてきたと批判した。ドレーパーが言及しているキリスト教というのは主にローマ・カトリックが念頭に置かれているが、ドレーパーはプロテスタンティズムもまた理性を信仰の下位に置くために科学者を呪詛してきたと批判した。

谷本の議論はドレーパーに依拠し、科学の発展によるキリスト教神学の動揺を鋭く指摘した。原田は「創世記」の記述が詩歌的なものであり、科学的な正確さを求めるべき性質の者ではないとして弁護しよう試みている。しかし原田のこのような立場こそ、谷本からすれば科学に対する「讓歩」によって何とか立場を保とうとする神学者の「詭弁」であり批判に値するものであった。原田は奇跡に關しても、その記述の多くは価値の少ないもので殆どを無視しても信仰上に損失する所はないであろうとの考え方を示しているが、これはもは

や原田が伝統的なキリスト教理解から外れ合理的な神学を志向するにいたつていることを示している。こうして原田は谷本の議論をある程度認めつつも、なおキリスト教を弁護するという苦しい立場に追い込まれている。

第三章の「耶穌教經典の不確立」において谷本はシユトラウスやパウルの聖書の歴史批評的研究を紹介し、福音書がイエス死後に年月を隔てて仮作された神話的物語であり年とともに付け加えられ形形成されたものであるとする。またモーセ五書と言われている部分が「エロヒスチック」「エホヴキスチック」「祭司法典」「申命記」などに分けられ、それぞれ成立年代を異にするという「高等批評」の成果を紹介する。また新約聖書の各書についても著者と成立年代についての論争を紹介し、結論的には「耶穌教ハ決シテ當初ヨリシテ一定不動ノ教説信条ヲ有セシ者ニ非ス……既ニ耶穌教ノ神聖ハ忽焉トシテ地ニ落ツヘシ」と述べる。谷本はこうして聖書の権威を攻撃することにより、キリスト教の信仰を動搖させることを狙った。

これに対し原田は、「現今通用する聖書の記載する所を以て文章記事悉く神語神言なりとする教説（即ち聖書無謬説）の如きは宗教改革以後の所説にして、基督教の主意精神に反するの甚しきものなり、神語神命を確立して以て信仰を強制するは聖書の目的にあらず」と答えている。すなわち原田は谷

本の「高等批評」の成績を認めつつ、谷本が攻撃の対称にしている「聖書無謬説」そのものを「宗教改革以後の所説」として歴史的に相対化し、さらに「基督教の主意精神に反する」と否定している。

第四章「耶穌教教義の自家撞着」において谷本は、創世記中のアダムとイブの原罪物語をキリスト教の中心教義であると設定してこれを攻撃する。谷本はアダムとイブが罪を犯したことだけでその子孫を上帝が罰するのは理不尽であると主張する。これに対して原田はアダムとイブの記事をキリスト教の中心教義と断定することはできないし、それを記事そのままに信ずるべきものでもないと反論している。原田は結論として「昔し夫れ基督教徒中の頑迷なる者に向つて痛撃を加へ、又幾多の不合理なる信仰、謬妄なる習慣等に對して爆撃を与へたるが如きに至つては吾人著者と全く意見を同うするもの二三のみならず、吾人は基督教駁議が基督教の真相を顕明することに於て効用少なからざるを知る、是れ著者に對して謝せんと欲するところなり」と述べ、図らずも自らが谷本の利用した近代聖書学の合理的見解と根底において同じ位相にあることを認めている。

すなわち原田は「高等批評」を受容した上でなお信仰の存立可能を主張したのであるが、このような原田の主張を理解できる者は多くはなかつた。キリスト教界にはなお谷本が攻

聖の対象とした「聖書無謬説」を素朴に信ずるものが少なからず存在し、彼らには「高等批評」を受け入れる事はすなわち信仰の否定を意味したのである。

### 浅田栄次「高等批評とは何ぞや」

谷本富が「高等批評」を利用してキリスト教批判を展開した事は、「高等批評」を最新の聖書学の成果としてアメリカで学んできた浅田に魯威を与えた。谷本の議論は原田が指摘したように細部に多くの誤謬を伴うものであつたが、それでもなお谷本の議論には浅田の学んだ「高等批評」に内在する矛盾を鋭く突くものが伏在していたのである。浅田が『六合雑誌』第一六二号で著した「高等批評とは何ぞや」は原田助の反論と同じ時期に執筆された論文であるが、この論文は浅田の危機感を表しているといえるであろう。

浅田栄次は『六合雑誌』一六二号（明治二七年六月十五日号）に「高等批評とは何ぞや」という一文を寄せて自らの立場を明らかにするとともに、眞の「高等批評」が信仰と衝突するものではないと弁護する必要があつた。聖書批評学には諸写本を比較して原文の校訂などをする「下等批評」（low critics）と、その成果を基に記事の年代や筆者の推定などを行う「高等批評」（high critics）がある。さらに浅田は当時

の「高等批評」を三つに分類し、「保守派」、「自由派」、「中立派」に分ける。浅田は自らを「頑固派の臭味を脱し、過激派の危険に臨まずして、穏当なる中立派高等批評家」として位置づける。

次いで浅田は「高等批評」の歴史をふり返り、ルーテル、カルヴァンから現代の高等批評家までの名を多数挙げ、イエス・キリスト自身が高等批評家であつたと主張する。結論として「高等批評」が信仰に有害であるという説に対し、「……仮令ひ高等批評にして神学を転覆することありとするも、未だ以て聖書を破壊するものとなすを得ず、而るを況や之をして真理の大仇敵となすに於てをや。吾人は火薬の爆裂を見て化学を怖るるものにあらず、汽車の転覆を見て工学を悪むものにあらず、故に高等批評なる一種の聖書学に對して、何の怖るゝ所もなく、又何の惡む所もあらざるなり。唯世間往々過激なる高等批評を事とし、聖書の光輝を遮り、真理の普及を妨ぐるものあるを哀むのみ」と主張する。すなわち「高等批評」は方法論であつて議論を組み立てる道具に過ぎず、直ちに信仰や伝統を破壊するものではないと弁護するのである。

しかし一方で、浅田は「高等批評」を誤つて用いた例としてユニオン神学校のブリッジスや金森通倫を挙げ、「教会一般の知識の程度を慮らずして、突然妄りに聖書に関する新論著

説を発表し、……反つて教会の攻撃を招き、……反つて異端論者の醜名を蒙り、……遂に自己の教職を喪いつたと批判した。この浅田の批判には相当な無理があるといわねばならない。なぜなら浅田がアメリカのユニオン神学校で師事したのが他ならぬブリッグスであつたからである。

ブリッグスは一八九〇（明治二三）年にユニオン神学校に設けられた聖書神学の教授となる就任講演で、「高等批評」をいち早く取り入れ聖書は一字一句神の靈感を受けており誤りは無いとする逐語靈感説を激しく批判したことが原因で長老派教会で異端審問にかけられた。<sup>㉙</sup> ブリッグスは一八九三（明治二六）年には長老派教会の教職を奪われ、その報道は日本のキリスト教界にも詳細に伝えられた。浅田がユニオン神学校在学中にメソヂスト教会の発行する雑誌『護教』第二三号（明治二四年一二月号）に寄稿した論文「聖書を学ぶ人に告ぐ」ではブリッグス教授の事件についてこのように触れている。

こともなく其の著書を読みしこもなきものなり是れ甚だ信し難きか如くなれとも拒むへからざる事実なり夫れ米国にすら無見識のもの此の如く多し故に我邦の如きは甚た責むるに及ばずと雖とも此類の學術に至るまで歐米の跡を追ふは頗る嘆かわしきことといふへし然りと雖とも反対の極端に走り新論奇説に途へは一も二もなく直に之を信し眼に触れ手に触るゝものを悉く丸呑みにするか如き勝学者は只に基督教会に用なきのみならず却て學術社会に害を与ふるものなり<sup>㉚</sup>

浅田はアメリカ留学中には上述のようにブリッグスを擁護し、且つブリッグスと「高等批評」へのキリスト教界内での批判を知りつつ師事することを決断したのであつた。やえに浅田が後になつて「高等批評とは何ぞや」において、谷本の攻撃をかわすために自己の聖書学の基礎を教えたブリッグスを批判するのは矛盾であり自己欺瞞ですらある。しかし、浅田がこうした自己欺瞞を犯してキリスト教会内での保身を圖らねばならないまことに、谷本の「耶穌教駁議」によつて「高等批評」へのキリスト教界内での拒否反応が高まつたのである。原田助の反論が直接に谷本と対峙していたのに対し、

「吾が愛する兄弟姉妹よ唯此輩の新説を唱ふるを聞き其の従来の定論に抵触する所あるを見て直ちに之を目して異端となし玉ふなけれ今日米国長老教会にて有名なる博士ブリッグスを以て異端主唱者となし暨々論を構へて同氏を教会外に放逐せんと企図するもの十中五六までは未だ曾てブリッグス氏を見し」ともなく其の演説を聞きし

する事を意図したものであつた。それは谷本が近代聖書学と「高等批評」の成果を利用して、いわば敵の武器をもつて敵を攻撃すると称してキリスト教批判の議論を開いていたからである。そして浅田がアメリカで学んだ近代聖書学の「高等批評」にも伝統的な信仰への批判が内在させていたのであり、浅田は近代聖書学を神学部で講じていたことに教会内の保守派から批判が出る可能性を見て取つたのであつた。

原田の言葉を借りれば、彼ら保守的な神学者たちは「聖書批評学は即ち聖書の誤謬を指摘する者にして、其の神聖を損害する者なり、聖書批評をして若し真ならしめば吾人が信仰の基礎は忽ち転覆するに至らん、故に吾等は飽くまでも聖書批評に反対せざる可からず」と、浅田の「高等批評」を聖書の「神聖を損害する」ものと批判したのである。浅田はこうした批判から「高等批評」を擁護し保守的神学からの攻撃をかわしつつ、自らの神学的立場を教会内で擁護しなければならなかつた。

しかし、こうした努力にもかかわらず皮肉にも浅田自身がブリッグスと同じく「高等批評」を教えた事を批判され、一八九七（明治三〇）年には青山学院神学部教授の地位を去ることを余儀なくされる。この青山学院における浅田の排除は「宗教と教育の衝突」のもう一つの側面に光を当てている。それは、いつたといかかる意味においてか。

### もう一つの「宗教と教育の衝突」

「宗教と教育の衝突」を巡る議論は、これまで井上哲次郎が提起した教育における国家の要請と宗教との衝突という側面でのみ語られてきた。しかし浅田の「高等批評」を巡る青山学院からの排除へ至る経緯は、宗教教団の經營する教育機関の内部においても「宗教と教育の衝突」が発生していたことを示している。それは一方に教団の要請する宗教教育の性質と、もう一方に眞実を追究しようとする学問的要請の間に発生した衝突であった。そしてこのもう一つの「宗教と教育の衝突」によって、宗教教団の經營する学校から排除された教育者は浅田一人ではなかつた。

帝国大学文科大学の初代心理学教授元良勇次郎（一八五八—一九一二）が宣教師との対立から青山学院の前身である東京英和学校から帝国大学と移らざるを得なかつた経緯は、浅田栄次の青山学院での神学教育からの離脱の前哨ともいえる。元良勇次郎は一八八三（明治一六）年ボストン大学に哲学を学び、一八八五（明治一八）年よりジョンズ・ホプキンス大学のスタンレー・ホール<sup>①</sup>に師事し心理学を学んだ。一八八八（明治二二）年博士号を取得して帰朝し東京英和学校に心理学を教えた。しかし一八八九（明治二三）年二月に元良

勇次郎は宣教師との対立により東京英和学校を去る。そのきっかけとなつたのは、元良が講演に招いた生物学者箕作佳吉が進化論に基づき創世記の創造説を攻撃したことであつた。岡田哲藏は東京英和学校での元良勇次郎と宣教師の対立について次のように述べている。

「宣教師側では先生を唯物論者と見なしてしまつた、然して波瀾はさきにいう講演会から起つた、二月のはじめ箕作佳吉博士が来られて生物学の講演をなされたが、その中に昔は神が六日間に万物を創造したと信じて居たが今の学者はさう思はないと言はれたのが、爆発的因素となつたのである、かかる異端説を唱ふる学者に講演をさせた元良先生がよくないと非難されたのである、これを以て当時の宣教師の思想の如何なるものであつたか想像せらるゝであろう。」

井上哲次郎が教育と宗教を分離する必要を主張した背景には、元良勇次郎が経験した「宗教学校」における宗教教団の要請と学問的真実の追究との衝突があつたのである。元良が「宗教学校」から排除されたことは、井上哲次郎にとつては教育に宗教権力が介入することによって引き起こされた弊害とみなされた。

していまう一つの「宗教と教育の衝突」は、井上哲次郎の主張する国家体制と衝突するキリスト教という枠組みと補完的な関係にあつた。井上哲次郎は帝国大学文科大学教授として元良勇次郎の同僚でもあつたが、元良の回顧談として次のように述べている。

学校を經營する宗教教団の立場からするならば、学校での教育は布教の一手段であり宗教活動に携わる牧師や伝道師などの教職者を養成する場でもあつた。しかし元良の如くアメリカにおいて学んだ合理的な科学的思考は、すでに宗教教団内部の保守的宣教者との衝突を避けられないものにしていつたのである。そしてこの宗教教団の經營する学校内部で發生

とによつて宗教教團の要請する教派的神學教育に抵抗した結果、青山學院を排除されたのであつた。確かに原田や浅田のようにアメリカの神学校で合理的な近代聖書学を学んだ者にとって、谷本の議論は彼らの学んだ神學と同じ方法と精神を持つていたのであり、それゆえ兩者の差異は主張をどこまで進めるかという程度の問題でしかなかつた。そして議論をどこまで進めるかを決めるのは、キリスト教界という範囲に留まるか、それともそこから出るかという個人の実存的な信仰のあり方に直結していたのである。浅田と原田は谷本を批判することによつて、キリスト教界の中に生きることを選択した。しかしその批判の過程で彼らの学んできた合理的な近代的聖書学が、未だ教会内では勢力を保つてゐる保守的な神學と相容れないといふことが明るみになつたのであつた。こうしてそれまで曖昧にされてきた、教会内における保守派の神學と「高等批評」との間の衝突が引き起こされることになる。

谷本の議論は細部においては原田の反論で指摘された如く誤謬だらけのものであつたにもかかわらず、教会内の神學上の対立の契機を明るみに出したといふ点においては成功したといえよう。

しかし谷本自身の「宗教と教育」についての思想は、この「耶穌教駁議」をめぐる論争によつて大きな変化を受けることになる。谷本は「宗教と教育」の関係について「耶穌教駁議」

を発表した当時には、井上哲次郎と同じく「宗教上及び哲學上の議論は断然忌憚禁止すべし」と主張し、「教育勅語」に基づいた道徳教育で十分であると論じていた。また後の回想でも「當時自分の祖述した教育学は例のヘルバート派教育学で、斯学には教授の目的中に宗教的興味の振起をも高調しており、全体の仕組みが頗る耶穌教的に出来て居るが、自分は依然教育と宗教とを混一せず、従つて宗教的氣分は抜いて教して居た」と語つている。しかしこうした谷本のキリスト教觀また「宗教と教育」の関係に関する主張は、谷本が海外出張からの帰國後には大きく変化する。

### 谷本の思想の変化

谷本は一九〇六（明治三九）年二月二十五日に仏教教育財團が中心に經營する京都中學設立に際しての講演を京都市議事堂において行い、この講演は後に『宗教と教育との関係』と題して出版された。谷本は井上哲次郎らが引き起こし自らも一端を担つた第一次「教育と宗教の衝突」論争について次のように回想している。「今日より翻つて見れば、耶穌教の教義は格別教育勅語と衝突したる所は無い、仏教でも耶穌教でも何にも教育勅語と直接に反対する所は無い……これから後は一層時勢が変つて一旦排斥した宗教に却て其力を借りなけ

ればならぬようになる」と、谷本は宗教が教育へ関与することを積極的に評価するようになつてゐる。さらにまたキリスト教についても新仏教勃興の刺激となつたと積極的な評価を下すようになつてゐる。

また谷本は一九〇五（明治三八）年一二月から翌年六月までの京都府教育会における連続講演を「新教育講義」として出版した。谷本は井上哲次郎の「宗教の将来に関する意見」によつて引き起された第二次「教育と宗教の衝突」議論を修正するという形で、宗教教育の不可欠を主張する。井上哲次郎は「倫理と宗教との異同いかん」と題する論文で、将来の宗教は「倫理的宗教」へ向かうとして宗教を倫理の中に包括し、既存の特定の「歴史的宗教」ではなく実践倫理と同一化した宗教の必要性を認めたのであつた。谷本はこうした井上の主張に對し、倫理に包括しきれない宗教心の養成が必要であると主張した。谷本の宗教心とは「天地全体に吾々が対し人生全体に吾々が対した時の反動の姿」であつて、倫理德目として挙げられる君に對する「忠」親に對する「孝」といった「個々相対の境遇」とは異なるものであつた。しかし谷本がこの講演で宗教教育の具体的方策として挙げているものといえば冷水浴、天然を愛する事、美術や音楽を奨励する事など宗教教育の内容としては貧弱なものに終わつてゐる。しかし谷本は「耶蘇教駁議」発表當時に主張していたような

宗教と教育の分離という方向に對しては、明確に反対の立場を表明するようになつてゐる。こうした谷本の思想の変化の原因は何であつたのか。

一つの理由は谷本が一八九九（明治三二）年九月より海外出張を行いフランスやドイツでの宗教と教育のあり方、またキリスト教と國家のあり方について視察した事による。フランスのパリでは「羅馬旧教の社会的に行届いて居る」ことに注目し、イギリスでは「同國の善良なる風俗は全く宗教の堅牢なる基礎の上に置かれたもの」である事を發見した。またスコットランドでの禁酒運動に影響を受けて自らも禁酒を決心し、アメリカでは基督教青年会の活動をみて「今後は宗教と教育との提携を計らねば真に有効なる教育は出来ない」と考へるようになつてゐた。

しかし、ここに一つの疑問が生じる。確かに海外の実情を視察したことは谷本の思想の変化の一つの原因となつたであろう。しかし、それだけでは教育における宗教の役割を積極的に認めるようになる谷本の思想の変化を説明する事は出来ない。なぜなら宗教と教育の分離の主張もまた、歐州留学を経験した井上哲次郎によつて主張されたものであつたからである。ゆえに谷本が教育における宗教の役割を評価することになる思想的転換を單純に海外留学に帰する事は出来ない。谷本も井上の「ことく正反対の評価を導く事も出来たはずであ

る。それを阻み谷本に以前の自分の主張とも全く異なる結論を出させたものは何であつたのか。谷本の思想の転換は、むしろすでに海外留学前に準備されていたのではないか。

ここで「耶穌教駁議」を巡る議論に登場するもう一人のキリスト教思想家、大西祝の思想を考察せねばなるまい。

### 谷本富と大西祝

谷本の思想の変化に最も大きく影響を与えたのは、大西祝との「高等批評」を巡る議論であつた。大西祝は一八八一年六月に同志社英学校普通科を卒業した後、統一して同校の神学科に進み一八八四（明治一七）年六月に原田助らと共に神学科を卒業した。そして一八八五（明治一八）年一月に東大予備門の最上級である東大予備門前本齋第一年級（第三年級）に編入学し、同年九月には東京大学文学部に入学した。一八八六（明治一九）年三月に「帝國大學令」により東京大學が改称され、大西は帝國大學文科大學哲学科一年生となる。谷本は大西と同年に選科一年生として籍を置き、大西ら本科生と共に教育を受けた。大西は一八八九（明治二二）年七月に帝國大學を首席で卒業し、大學院に進学を許された。谷本の回想によれば大学在学中に大西の誘いを受けて海老名彈正のキリスト教講演会にも出席したが、谷本は

海老名の「創世記」に関する講演に反発し「進化論を真向に振翳し、大に駁論した」。このように谷本富と大西祝は東京大學在学中より交友があり、谷本と大西の関係は大西の死まで続いた。谷本は大西の逝去後に『大西博士全集』の出版にも尽力している。

谷本と大西は井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」を巡って、「宗教と教育」の関係また「高等批評」について激しい議論を展開し思索を深めていった。大西が帝國大學大學院に在籍中に井上哲次郎はドイツ留学より帰国し、一八九〇（明治二三）年一〇月二三日に哲学科教授となつた。それゆえ大西と井上は師弟関係であつたともいえるが、大西は「当今の衝突論」のなかで激しく井上に反駁した。

「予が井上博士の論を見たる限りに於ては、バイブル中の文句を其前後の正当の関係より、其眞実の精神より引き離して、此れが忠孝に反す此れが勅語に反すと論ぜられたる所あるを見る。予は博士の為に惜しまずんばあらず。何となれば此の如きの論は浅薄の譏を免れざればなり。予は井上博士が「高等批評」なる者に目を閉ぢてバイブルの文句を論ぜられたるを深く惜む」

ここで大西は井上が聖書を曲解したのは「高等批評」を知

らなかつたためであると論じた。大西自身が「高等批評」をどのように理解していたのかという点については、「批評的精神」という論文で明らかにしている。この論文が掲載されたのは「六合雑誌」第一六二号（明治二七年六月一五日発行）であり、浅田の論文「高等批評とは何ぞや」や原田助の「耶穌教駁議を読む」（第三章）も同じ号に掲載されている。この論文の中で大西は「高等批評」が教会の平和や聖書の権威を守るためのものではなく、かえつて批評によつてそれらが動搖させられている事実を認めていた。それゆえ大西が井上の「高等批評」への無知を批判したのは、大西が井上の議論からキリスト教を擁護するためなどではなく、井上のあまりに浅薄な聖書の引用の仕方を批判するためであつた。

この時すでに大西自身のキリスト教理解は正統的キリスト

教信仰の枠をはみ出していた。大西は大学院生になつた頃から教会への出席や祈りも止め、一八九四（明治二七）年には日本ゆにてりあん協会の經營する「先進学校」の教頭となつてゐる。また横井時雄が「高等批評」を用いて正統的キリスト教信仰を批判した「我邦の基督教問題」に序文を（六合雑誌）第一六八号、明治二七年一二月）寄せている。すなわち大西の井上への批判は単純なキリスト教擁護論などではなく、「批評」の方法を確立するという目的をもつて井上に述べたのであった。谷本の「耶穌教駁議」は大西のいう「高等

批評」が持つ伝統や教義に対する破壊力を利用してキリスト教側を再批判し、浅田や原田らキリスト教側の動揺と反発を招いた。谷本は大西に応えて「高等批評」を踏まえて聖書を読めば、いかなる結果になるかということを提出することを試みたのである。谷本と大西は雑誌の紙面上で議論を行つただけではなく、手紙も頻繁にやり取りしてこの問題について論じていた。一八九三（明治二六）年五月一九日の谷本の大西宛手紙では、「例の『宗教々育衝突論』は中々繁盛なり。これに付ても小生は御存の通り大の耶穌教嫌ゆゑ、充分一槍相可申答にて、……小生の耶穌教、否寧ろ有神哲学を信ぜざる理由に就ては、他日一書を著すべし時あるべく自信にて」と、谷本が「宗教々育衝突論」についてキリスト教批判の論文を準備している事が書かれている。

大西は谷本に応えるべく再び「宗教と教育」において、教育から宗教や哲学を全て排除するならば人格的感化力を失い無氣力な教育となると指摘し、「教育勅語」で表明されたような通俗的な忠孝では品性を養成し得ないと論じた。さらに大西は「当今の衝突論」の中で井上や谷本への強烈な批判を行つてゐる。

「若し一哲学者の大真理と信ずる所を非真理とせよと命ずる如き國家の元首あらば、其哲学者は縱令断頭台上の

露と消ゆるとも其信する所を枉ぐ可からざるにあらずや。是れ真理の為に其身を献げたる学者の本分ならず

や。少しく世人の攻撃に遇へば安からざる思を為す如き腰弱き学者の多きをこそ歎すべけれ。我身を賭しても己が信する所を主張する学者のあることは、少しも嘆かはしきことに非<sup>(レ)</sup>ず」

国家主義を鼓吹する御用哲学者と成り下がつた井上哲次郎と、その井上哲次郎に便乗してキリスト教批判を行つた谷本富。しかし、大西は谷本とは対照的に己の地位や身体を賭けて真つ向から井上哲次郎を批判したのである。こうした姿勢こそが大西の「批評的精神」の真に意味するところであつた。一八九八（明治三二）年二月に大西祝は京都帝国大学文科大学の設立準備のため、文部省より歐州留学を命じられた。しかし大西は歐州留学中に神經衰弱に陥り、一八九九（明治三三）年九月に歐州留学に出発した谷本富と入れ替わるように帰国を余儀なくされ、翌一九〇〇（明治三三）年一月二日に逝去した。谷本もまた大西と同じく京都帝国大学文科大学の設立準備の命令を受けて歐州留学へ向かつたのであるが、谷本が大西の訃報を受け取つたのはフランスのモンテリエに留学中のことであつた。こうして大西は三十六歳という若さでこの世を去つたが、己の身を賭して「批評的精神」を體現し哲学

者としての節を守つた。谷本は大西の影響に就いて次のように語つてゐる。

「此事に就いては私の格別の友人、友人中の最も親しき友人なる故文学博士大西祝君が嘗て宗教と教育との関係に就て述べられたことがあります、（中略）自分は宗教臭味を帶びざる所の教育は完備せる教育と云ふ事を得ざるものと断言するに憚らないのであると云はれた事があります」

谷本の海外留学とその途中におこつた大西の死への負い目が、谷本に大西祝の主張の正当性を認識しそれを継承することを決意させたのであるまいか。こうして谷本は帰國後には宗教と教育の分離を主張する井上哲次郎の批判をあえて行い、宗教の教育における不可欠を主張するようになるのである。しかし結局は谷本の「耶穌教駁議」も、また谷本を批判した浅田も「高等批評」という方法論に目を奪われ、大西の言う「批評的精神」がいかなるものかを理解していなかつたのではないか。眞の「批評」とは大西が體現したごとくに、真理と信する所を己の總てを賭して守る精神であった。「批評的精神」とは谷本や浅田のように世論や流行に合わせて、自らの保身のために「批評」を振り回す事ではなかつたのである。

だが少なくとも大西祝、原田助、浅田栄次など明治のキリスト教思想家達との「耶蘇教駁議」を巡る一連の議論は、谷本が「宗教と教育」の問題の考察をさらに深めて行く契機にはなつたとは言えるであろう。しかし谷本や浅田の浅薄な宗教理解——「高等批評」と呼ばれる方法論により合理的思考を推し進めその「批評的精神性」を見失つた——は、結局のところ宗教ディレクタンティズムに終わり、実際的効果を教育に及ぼすことはなかつたのである。

### 注

- (1) 浅田栄次「聖書の三良友」「浅田栄次追憶録」一九一六年、私家版。
- (2) 谷本富「耶蘇教駁議」「哲學雑誌」第79—83号、明治二六年九月一  
明治二七年一月号。
- (3) 浅田栄次「駁耶論者の厚意」説教稿、周南市立中央図書館蔵。
- (4) 谷本富「自伝と教育学説」「教育」第2卷第1号（昭和九年一月一  
日発行）。
- (5) Emil Hausknecht, 1853-1927.
- (6) Johann Friedrich Herbart, 1776-1841.
- (7) 「東京帝國大学五十年史」一九三一年、東京帝國大学、一二二一八頁。
- (8) 楠葉宏雄「谷本富と沢柳政太郎」「京都大学教育学部紀要」第37号、  
一九九一年。
- (9) 谷本富「実用教育学及教授法」一八九四年、六盟館。
- (10) 谷本富「将来の教育学」一八九八年、六盟館。
- (11) 谷本富「新教育講義」一九〇六年、六盟館。
- (12) Joseph Edmond Demolins, 1852-1907.
- (13) 鳩松武「谷本富における教育思想の変遷」「東京学芸大学紀要」  
第21集、一九七〇年。
- (14) 池田進「谷本富教授の生涯と業績」「京都大学教育学部紀要」IV、  
一九五八年。
- (15) 井上哲次郎「教育と宗教の衝突」一八九三年、敬業社。
- (16) 井上哲次郎「教育と基督教ノ衝突」敬業社、一八九一年。
- (17) 関尾作「井上博士と基督教徒」一八九三年、哲学書院。
- (18) 谷本富「耶蘇教駁議」序論」「哲學雑誌」第79号、明治二六年九月  
号。
- (19) 谷本富「自伝と教育学説」「教育」第2卷第1号（昭和九年一月一  
日発行）。
- (20) 小崎弘道「日本基督教史」（小崎全集、第二巻）小崎全集刊行会、  
一九三八年、一四一—一四五頁。
- (21) 金森通倫「日本現今之基督教並其将来之基督教」一八九二年、金  
森通倫。
- (22) 横井時雄「我邦の基督教問題」一八九四年、警醒社。
- (23) Adolf von Harnack, 1851-1930.
- (24) Rudolf Christoph Eucken, 1846-1926.
- (25) 原田健繩「原田助遺稿」一九七一年、四九七頁。
- (26) John William Draper. "History of the Conflict between Religion and  
Science," D. Appleton, New York, 1874.
- (27) David Friedrich Strauss, 1808-1874.
- (28) Ferdinand Christian Baur, 1792-1860.
- (29) Charles Augustus Briggs, 1841-1913.
- (30) Mark Stephen Massa. "Charles Augustus Briggs and the crisis of  
historical criticism," Fortress Press, 1990.
- (31) 浅田栄次「聖書を学ぶ人に告ぐ」「講義」第23号、明治二四年二  
月号。
- (32) 浅田栄次「高等批評とは何ぞや」「六合雑誌」第一六二号（明治二  
年六月一五日発行）。
- (33) Granville Stanley Hall, 1844-1924.

- (34) 岡田哲藏「程田の森の密議」『元良博士と現代の心理学』一九二三年、弘道館、四二四頁。
- (35) 井上哲次郎「大学時代」『元良博士と現代の心理学』一九二三年、弘道館、一五三頁。
- (36) 谷本富「教育学及教授法」一八九四年、六盟館、一七八頁。
- (37) 谷本富「予が半生の宗教的方面」『宗教の新意義』一九一五年、日月社、「一四頁。
- (38) 谷本富「宗教と教育との関係」一九〇六年、六盟館、四〇頁。
- (39) 井上哲次郎「宗教の特徴に関する意見」『哲学雑誌』第14卷第154号、明治三三年一二月一〇日号。
- (40) 井上哲次郎「倫理と宗教の異同いかん」『哲学雑誌』第18卷197号、明治三六年七月一〇日発行。
- (41) 谷本富「新教育講義」一九〇六年、六盟館、四九九頁。
- (42) 谷本富「予が半生の宗教的方面」『宗教の新意義』一九一五年、日月社、「一七頁。
- (43) 平山洋「大西祝とその時代」一九八九年、日本図書センター、八七頁。
- (44) 谷本富「予が半生の宗教的方面」『宗教の新意義』一九一五年、日月社、「一〇五頁。
- (45) 大西祝「当今の衝突論」『教育時論』第295号（明治二六年六月）五日発行。
- (46) 石闇敬三・紅野敏郎編「大西祝・幾子書簡集」一九九三年、教文館、四三〇頁。
- (47) 大西祝「宗教と教育」『六合雑誌』第165号（明治二七年九月）五日発行。
- (48) 大西祝「当今の衝突論」『教育時論』第295号（明治二六年六月）五日発行。
- (49) 谷本富「宗教と教育との関係」一九〇六年、六盟館、九一一〇頁。

（のさき・こういち 筑波大学大学院博士課程  
哲学・思想研究科）